Cambridge での留学生活

岡本尚也
Cavendish Laboratory, University of Cambridge, United Kingdom
November. 2013

Cambridge での生活

留学生活も 3 年目の終盤に入り、Cambridge での生活も残りわずかとなってきました。研究以外の生活面では、3 シーズン目を迎えたバレーボール部での活動、様々な教育に関する事業が生活の中心となっています。3 シーズン目という事もあり、バレーボール部ではチームをまとめる役割を担っています。留学を始めた当初は日本で使われているバレーボールに関する用語が世界のものと大きく違う点や文化の違いに戸惑いを感じていましたが、シーズンを重ねるにつれてそれにも慣れ、チームメイトとの強い信頼関係を築くことが出来ています。チームの特徴はやはり多国籍という点です。Cambridge は人の入れ替わりが早い（修士コースが一年で修了する）ため、三年間ですべての大陸の人と一緒にバレーボールに取り組みました。遠征の際の車内では、お互いの国の話や研究の話、ある議題に関する議論等が行われるため、大変勉強になります。先週の車内では、日本人（私）、ドイツ人、中国系シンガポール人、ケニア人の友人と民主主義に関する考え方やそれぞれの国の歴史について議論を行いました。想像していた範囲内の議論も多かったですが、実際に体験した事から発せられる言葉はとても重みがある上、国や立場が違えば同じ対象物でも全く違う様相を見せる点はとても示唆に富んでいます。特にシンガポールのような特殊な政治体制（非民主主義的だが比較的うまく行っている）を持つ国の国民の視点と、これから民主化が進んでいくアフリカ諸国（民主化に対する憧れがある）の国民の民主主義に対する考えは異なりますが、それぞれの国の視点ではその考えが「正しい」と考えられている事実。極めて相対的な物差しを持って、議論に臨まなければお互いを理解する事は難しい。このような環境が身近にある事が Cambridge での生活の醍醐味だと思います。教育に関しては、日本の高校生を対象にした講演や自治体の事業を受け持ったりと良い経験を積ませてもらっています。教育界もグローバル化の大きな風が吹いていますが、その中で自分の日本社会における役割をしっかり見極め進んで行きたいと思います。

(a)

(b)

図 1: イギリスでの生活 (a) 今シーズン初戦後の写真。(b) 岡山県立津山高校生へ向けた講演の様子。

研究に関して

研究もまとめる段階に入りました。ここ二年近く取り組んでいた研究内容を論文にまとめ、学術誌に投稿しReviewを終え、訂正したものを再提出している状況です。この研究を行うに当たりイギリスだけではなくチェコ、アメリカの世界的な物理学者の方々と仕事を共に行いました。この中で痛感する事が、「主体性」の重要さです。共同研究者はいかなる立場の人間であれ、自分の研究に関する協力者であり、決して主導者ではないという事です。責任感と尊敬の念を持って研究を理解して上で自ら主導し、仕事を的確に割り振り、管理しなければバランスを崩し研究は座礁しかねません。この研究を通して良い仕事（結果を生む）をする為には、どこまで自分が主体性を持って行動をするかがカギであり、それが同時に高い満足度を生むという事を身を持って学ぶ事が出来ました。残り少ない研究生活ですが、最後までしっかり取り組んでいきたいと思います。

このようにCambridgeにおいて、大変充実した留学生活を送れています。このような環境を与えた下さった公益財団法人船井情報科学振興財団の皆様には心よりお礼申し上げます。これからも精進を続けてまいりたいと思います。